



2019年6月6日放送

印象に残る症例①

六君子湯と桂枝加竜骨牡蛎湯の合方が失語症による自信喪失と食欲不振に著効した症例

静岡市立清水病院 リハビリテーション科 科長 坂元 隆一

患者さんは50代女性です。身長148cm、体重61.9kg、BMI 28.26でした。

主訴は食欲不振。

既往歴として、20年前から高血圧、25年前に脳梗塞の診断で他の病院の脳神経外科で診療を受けています。

現病歴としては、当院の脳神経内科からの紹介で、リハビリテーション科へ転科転棟しました。25年前の脳梗塞もあり、精査したところ、もやもや病でした。もやもや病で失語があるせいか、自信がないような表情で声も小さく、とても不安な印象を受けました。これは、当院の神経内科に入院中に言語聴覚士との言語訓練の場において、どのくらい良くなるのか、そうした不安げな表情をみせていました。

【治療経過】

治療経過として、食事はカロリーを半量に調節したハーフ食を提供していましたが、1～2割程度しか食べられませんでした。

転科転棟してきたその日の朝に、精神的な不安や体型などに注目して、それまで投与されていた六君子湯 7.5g/日に加えて、桂枝加竜骨牡蛎湯 7.5g/日を併用したところ、「食欲が出る漢方薬だからね」と患者さんに説明したプラセボ効果もあってか、同日の昼から主食副食とも8割食べられるようになりました。

その後は、継続的に食事を食べられるようになり、さらに血圧の数値に改善もみられまし

た。この薬はこんなに効くのかと私自身がとても驚きました。

一旦、自宅退院し、その後、もやもや病に対して、左浅側頭動脈-中大脳動脈吻合術（STAMAC バイパス術）を当院の脳神経外科にて施行しました。術後 1 ヶ月で当科へ転科転棟し、その時も食欲不振に対して桂枝加竜骨牡蛎湯（六君子湯は投与せず）を投与後、元気になる自宅退院となりました。退院前には、歩く姿もすごく自信に満ちて明るい表情で、とても声も大きくなり、私達から見ても暗い感じがなくなり桂枝加竜骨牡蛎湯の効果がみられたと判断しました。

六君子湯と桂枝加竜骨牡蛎湯との合方で、食欲不振に対する著効、速効性が見られた症例（虚証）です。

桂枝加骨牡蛎湯には、ゾウやサイなどの大型哺乳動物の化石化した骨からつくる竜骨という動物性の生薬、牡蠣の貝殻からつくる牡蛎という生薬が入っており、神経衰弱、不安があり自信のない人や不眠や精神不安に対して著効することを経験する安神・補虚剤です。芍薬と甘草で消化管の動きを滑らかにして、桂皮と生姜は温める作用があります。

私が、食欲不振の患者さんでまず注目するのは、大きな声を出せるかどうかです。大きな声を出せない方は、脳幹などに障害があって嚥下機能が低下していることが多く、大きな声を出せる方は、検査などをしても嚥下機能にそれほど問題がみられません。声が小さい場合は、その背景に何があって食べられないのかということを考えながら治療を行っています。

漢方薬は複数の生薬で構成されているため、このように主訴だけではなく、多岐にわたる症状を改善できるのも特徴の 1 つだと思います。この患者さんは、その後退院するまで 2 剤を飲み続け、声も大きくなり順調な経過をたどることができました。

六君子湯は、グレリンの作用により、食欲を亢進することがエビデンスとして示されています。そうした作用に加え、患者さんの食欲不振の背景にあると考えられる精神不安に対して桂枝加竜骨牡蛎湯が効果的であったと考えられます。

また、六君子湯だけで症状の改善がみられない患者さんで、うつ傾向がある場合には香蘇散を併用する（香砂六君子湯）とよい効果がみられることがあります。さらに、ストレスが背景にある方では、柴胡剤である四逆散（構成生薬に柴胡、枳実、芍薬等が入っています）との合方（柴芍六君子湯）で効果がみられることも経験します。

漢方薬は、まず使ってみて、そこで効果がなかったら、理由を考えるという使い方がよいのではないかと思います。また、漢方を使うと効果について患者さんからのフィードバックがあるので、西洋薬よりコミュニケーションが増すのも良い点だと思います。

【考察】

六君子湯は食欲不振に対するファーストチョイスであり、近年、多くのエビデンスが集積され、科学的な作用機序の裏付けがなされた漢方薬の 1 つであります。構成生薬は、人参、蒼朮、茯苓、半夏、陳皮、大棗、甘草、生姜の 8 生薬で、分解すると、「四君子湯」と「二陳湯」になります。

基礎研究によれば、六君子湯の構成生薬である蒼朮に含まれるアトラクチロジン、陳皮や

甘草に含まれるフラボノイド類、生姜のジンゲロールなどが協調して、グレリン系を介して食欲を高めることが確認されています。また、胃底部貯留能の向上による胃酸の buffering 効果の改善作用で、胃食道逆流症（GERD）に対する治療の選択肢ともなります。さらに、胃排出遅延の改善による胃内停滞量の減少をもたらす効果もあります。

【六君子のみでは効果不十分な場合の合方】

六君子湯の使用目標に抑うつが加わった症例では、香蘇散を併用すると「香砂六君子湯」として、食欲を増すという応答を引き出してくれます。

桂枝加竜骨牡蛎湯が六君子湯の効果を上げるのか、桂枝加竜骨牡蛎湯自体に自信喪失気味、特に失語のある方の精神不安に対しての直接効果なのかは断定できませんが、うつ傾向のある方に六君子湯に香蘇散を併用する「香砂六君子湯」と同じように、自信喪失をキーワードに六君子湯だけでは食欲不振が改善されないケースに、桂枝加竜骨牡蛎湯を合方することは、試してみる価値が十分にあると考えます。

本症例以降も主に失語があり表情や種々の生活態度全般で自信喪失気味の方に桂枝加竜骨牡蛎湯を投与しています。その中の症例では、高次脳機能で注意・遂行機能などの前頭葉機能の低下および記憶面・構成能力の低下を認めたケースでは、不安に陥ると注意・判断能力の低下が顕著に現れてしまう場面もみられましたが、桂枝加竜骨牡蛎湯の投与で徐々に改善した症例など、ほぼ全例に効果が認められました。

桂枝加竜骨牡蛎湯は「自信喪失」がキーワードで、リハビリテーションが進み、自信がつくに従って精神が安定し、体調が回復してくるという精神面の応答を引き出します。失語を含めた高次脳機能障害という自信を失うことに起因すると考えられる諸症状を治療対象とした、桂枝加竜骨牡蛎湯投与例では、暗い感じで神経過敏が共通していました。

症候の背後に自信喪失があることを問診であぶり出す、すなわち、症状初発の頃の生活史を丹念に問診する必要があると考えます。

構成生薬に竜骨と牡蛎（安神剤）が入っている桂枝加骨牡蛎湯は、西洋薬にはない優れた効果を期待できる漢方薬であるという確認ができたケースでありました。

一人でも多くの医師、歯科医師が、漢方薬の有用性に目覚め、処方できるようになることで、多くの患者さんの QOL が向上することを願います。また、医師のみならず、医療介護の現場でファーストタッチすることになる看護師、リハビリテーションスタッフ、介護士の漢方薬の知識も増えていき、全人的なアプローチで介護およびリハビリテーションにあたる際に、漢方薬の知識が役立つことを願ってやみません。